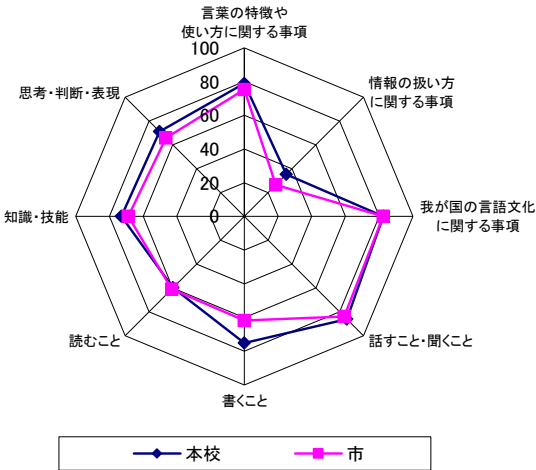


宇都宮市立戸祭小学校 第6学年【国語】領域別／観点別正答率

★本年度の市と本校の状況

		本年度		
		本校	市	参考値
領域別	言葉の特徴や使い方にに関する事項	78.9	75.3	77.1
	情報の扱い方にに関する事項	35.2	26.5	27.8
	我が国の言語文化にに関する事項	82.4	82.4	81.0
	話すこと・聞くこと	86.1	83.9	84.2
	書くこと	75.1	61.7	64.5
	読むこと	59.9	60.9	61.0
観点別	知識・技能	72.9	68.8	70.3
	思考・判断・表現	71.2	65.8	67.0

※参考値は、他自治体において同じ設問による調査を実施した際の正答率。



★指導の工夫と改善

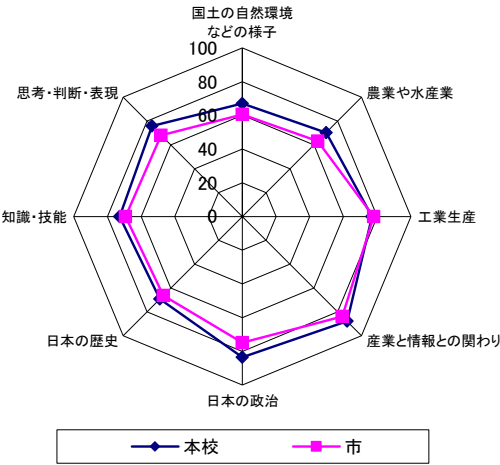
領域	本年度の状況	今後の指導の重点
言葉の特徴や 使い方にに関する事項	○第5学年の漢字の書きに関する設問は全て市の平均正答率を上回った。 ●第6学年の漢字の読みに関する設問は市の平均正答率をわずかに下回った。 ●敬語について正しく理解し、正しく使っているかの設問は市の平均正答率を1.5ポイント下回った。	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの ・漢字練習の励行や練習方法の工夫などを引き続き指導する。 ・尊敬語、謙譲語、丁寧語の種別についての復習を行う。また、相手に応じて正しい言葉遣いができるように、常時指導していく。
情報の扱い方 に関する事項	○情報と情報の関係について理解し、文章の情報を整理する設問では、市平均正答率を5.9ポイント上回った。 ○情報と情報との関係について理解し、目的に応じて、文章を簡単に書く設問では、市平均正答率を11.5ポイント上回った。	・複数の資料から情報を取り出す力は身につけている。今後も授業を通して、キーワードをおさえながら文章を整理し、解答する経験を積ませていく。
我が国の言語文化 に関する事項	○語句の由来に関心をもち、和語、漢語、外来語について理解しているかに関する設問では、市の平均正答率と同じであった。	・今後も、漢字の学習や意味調べ等を通して、漢字や言語に親しむ機会を設けていく。
話すこと・聞くこと	○インタビューの内容を聞き取る設問では、全ての設問において市の平均正答率を上回った。	・今後も、人の話を聞く時には、どのような内容かを考えながら聞くよう指導を続けていく。 ・普段の授業や児童会活動を通して、より多くの児童が発言をする機会を設け、発言する時には自分の考えを簡潔にまとめて表現することができるよう指導していく。
書くこと	○文章を書くことに関する設問では、全ての設問において、市の平均正答率を上回った。 ●目的や意図に応じて、書き表し方を工夫する設問では、市の平均正答率を3.3ポイント下回った。	・原稿用紙の使い方や句読点の打ち方など、書く力の基礎は身に付いている。 ・様々な分野の文章を読む機会を増やすと共に、目的や意図に応じて、どのような書き方の工夫があるか意見交換させるなどして、表現の工夫の仕方を身に付けさせていく。
読むこと	●物語の登場人物の様子を捉える設問では、市の平均正答率を8.6ポイント下回った。 ●物語の文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げる設問では、市の平均正答率を5ポイント下回った。 ●説明文の叙述を基に文章の内容を捉える設問では、市の平均正答率をわずかに下回った。	・物語を読むことに関して、引き続き、朝の読書の時間や図書委員会の企画等を活用して、児童が読書に親しみ、読む楽しさを味わえるよう指導していく。 ・説明文を読むことに関して、読書をする際は、様々な分野の文章に触れてみるよう声掛けすると共に、キーワードをおさえて読むことを指導していく。

宇都宮市立戸祭小学校 第6学年【社会】領域別／観点別正答率

★本年度の市と本校の状況

		本年度		
		本校	市	参考値
領域別	国土の自然環境などの様子	67.0	60.5	65.8
	農業や水産業	70.3	63.3	66.0
	工業生産	76.9	77.9	75.7
	産業と情報との関わり	87.9	83.8	76.6
	日本の政治	83.5	74.9	74.1
	日本の歴史	69.2	66.3	68.3
観点別	知識・技能	72.8	69.3	71.4
	思考・判断・表現	75.8	68.1	66.4

※参考値は、他自治体において同じ設問による調査を実施した際の正答率。



★指導の工夫と改善

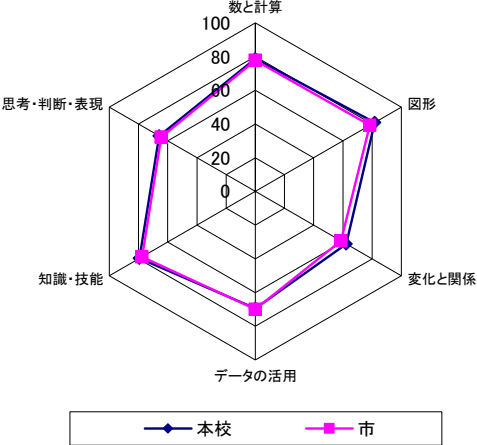
領域	本年度の状況	今後の指導の重点
国土の自然環境などの様子	○国土の構成について、地図をもとに考え表現する設問では、市の平均正答率を9.6ポイント上回った。 ●太平洋側の気候の特色を雨温図から読み取る設問では、市の平均正答率を0.5ポイント下回った。	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの ・季節に合わせて気温や降水量に特徴が表れることを地形と結び付けて理解が図れるよう指導を図る。 ・地図帳や地球儀等を用いて、日本の地名や海洋名等の知識を習得するとともに、日本とつながりの深い国については、正しく国名や国旗を理解し、外国とのつながりに関心がもてるように指導していく。
農業や水産業	○輸入などの外国との関わりにおける課題を問う設問では、76.9%の正答率で、市の平均正答率を9.7ポイント上回った。資料を読み取る力は付いているといえる。 ●日本の主な食料の自給率を問う設問では、市内の平均正答率を8.8ポイント上回っているが、45.1%の正答率で低かった。	・資料から読み取る力は身に付いている。さらに表現力を高めるために、授業の中で、資料から読み取ったことを文章にまとめたり、地図など図に表したりするなど、考えを自分なりに表現する活動を増やしていきたい。
工業生産	●自動車の製造工程を問う設問、自動車の部品を再利用する目的を問う設問、日本の主な輸出品・輸入品を問う設問のいずれも、市の平均正答率を若干下回っている。	・説明文や図等の資料を参照し、授業の中で適切な説明をする学習を繰り返し行っていきたい。 ・教科書に掲載されている工業統計のグラフを中心に、学習用端末を使用するなどして、児童が興味をもって学習できるような教材の工夫に励んでいく。
産業と情報との関わり	○情報の発信と受信の注意点について問う設問は、94.5%という高い正答率であり、情報リテラシーへの理解やメディアへの関心が高いことが分かる。	・調べ学習を行う際、インターネットを使用する上で必要となる情報リテラシーについても繰り返し指導を行っていく。
日本の政治	○日本の政治に関するいずれの設問においても、市の平均正答率を大きく上回っている。特に議会政治について資料をもとに考え表現する設問では、市の平均正答率を16.2ポイント上回った。	・政治に最近のニュースを話題にするなど、身近な具体例を交えながら関心を高める指導を行うようにする。
日本の歴史	○縄文時代から平安時代、鎌倉時代から室町時代に関するいずれの設問においても、市の平均正答率を上回っている。 ●安土桃山時代から江戸時代に関する設問では、市の平均正答率より2.8ポイント下回っており、課題が見られる。	・各時代における政治や文化について時代背景への理解を深めたり、現在との繋がりを考えたりするような学習活動を取り入れ、歴史に親しみをもてるようにする。 ・資料集等にある多彩な資料や歴史上のエピソードを紹介したり、学習用端末を使って動画の説明を視聴したりするなど、歴史への興味・関心を高めるようにする。

宇都宮市立戸祭小学校 第6学年【算数】領域別／観点別正答率

★本年度の市と本校の状況

		本年度		
		本校	市	参考値
領域別	数と計算	78.7	77.7	78.6
	図形	81.8	78.4	74.4
	変化と関係	62.3	58.7	53.0
	データの活用	69.4	69.9	57.2
観点別	知識・技能	79.4	77.5	74.0
	思考・判断・表現	65.9	64.5	58.4

※参考値は、他自治体において同じ設問による調査を実施した際の正答率。



★指導の工夫と改善

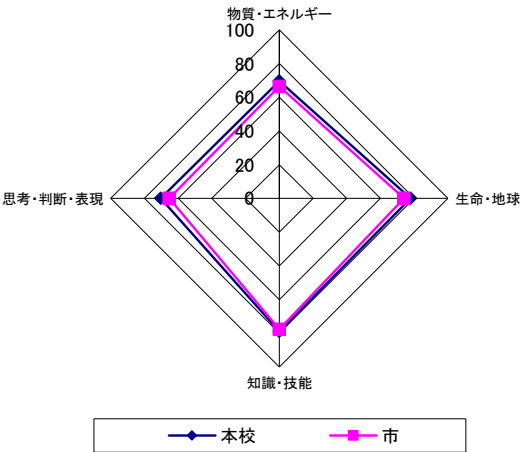
領域	本年度の状況	今後の指導の重点
数と計算	○分数や小数の計算問題の正答率が、市の正答率を上回っており、基本的な計算方法が定着しているといえる。 ●基準量から比較量を分数を活用して求める問題では、市正答率を6.6ポイント下回った。	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの ・家庭学習において、ドリル等を使った反復練習を積極的に行い、どの分野においても幅広く理解を深められるようにする。 ・基本的な計算問題だけでなく、応用問題や文章問題等にも取り組む時間を確保し、知識の定着を図る。
図形	○図形の面積を求める問題では、市の正答率を10.2ポイント上回った。 ○立体の体積を求める問題でも、市の正答率を6.6ポイント上回った。面積や体積を求める問題への理解度が高く、知識が定着しているといえる。 ●対称な図形に関する問題では、市の正答率を7.9ポイント下回った。	・それぞれの図形や立体の性質を比較してまとめる活動を行い、定義についてさらに定着できるようにする。 ・線対称な図形や点対称な図形について、基本的な性質だけでなく、作図を行う時間も確保し、多面的に考えることができるようにする。
変化と関係	○速さの問題に関しては、市の正答率を14.9ポイント上回り、高い正答率となった。速さを求める問題への理解度が高く、考え方が定着しているといえる。 ●混み具合に関する問題では、市の正答率を13.3ポイント下回った。	・割合や単位量当たりの大きさ・速さは5年生の学習内容であるが、苦手意識をもつ児童が多いため復習の機会を設ける。 ・割合は、6年生での「データの活用」においても使われるため、その際に復習ができるようにする。
データの活用	○グラフの読み取りに関する問題では、市の正答率を2.2ポイント上回った。 ○ヒストグラムをもとに、平均値付近の記録が一番多いわけではないことを説明する問題では、市の正答率を5ポイント上回った。 ●ドットプロットから最頻値と中央値を読み取る問題では、市の正答率を9.4ポイント下回った。	・最頻値や中央値などについて、自分たちの学級で実際にアンケートを取った結果から問題を解くなど、身近なところから考える活動を取り入れるなどして、理解を深められるようにする。 ・6年間で学習したグラフの特徴を整理したり、目的に合わせてグラフを選んだりする活動を取り入れ、グラフから適切に情報を読み取れるようにする。

宇都宮市立戸祭小学校 第6学年【理科】領域別／観点別正答率

★本年度の市と本校の状況

		本年度		
		本校	市	参考値
領域別	物質・エネルギー	69.6	66.5	66.3
	生命・地球	77.9	74.0	72.6
観点別	知識・技能	78.9	77.6	78.2
	思考・判断・表現	70.3	65.3	63.4

※参考値は、他自治体において同じ設問による調査を実施した際の正答率。



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

領域	本年度の状況	今後の指導の重点
物質・エネルギー	○「水溶液の性質」に関する問題で、未知の水溶液を特定する実験の方法を答える項目では、市正答率を7.9ポイント上回った。 ●「電流のはたらき」に関する問題で、コイルについての項目では、市の正答率を6.7ポイント、国の正答率を22.1ポイント下回った。 ●「物の燃え方」に関する問題で、物の燃え方の実験結果について検討する項目では、国の正答率を上回っているが、市の正答率と比べて3.9ポイント下回った。	・各単元の実験の際には目的を明確化し、なぜ実験をするのか、その実験を通してどんなことを知りたいのかなど、具体的にイメージをもちながら計画を立てることができるようにする。 ・実験の計画から考察までの流れをルーティン化することで、学習への抵抗感の軽減を図る。 ・他の班や教科書と同じ結果にならなかった場合、その理由を考える活動も取り入れ、考察力を養う。
生命・地球	○「天気の変化」に関する問題では88.6%、「生物とかんきょう」に関する問題では91.6%と共に高い校内正答率となっている。 ●「動物のからだのつくりとはたらき」に関する問題で、体温に近い温度は何度かを答える項目では、市の正答率を1.2ポイント、国の正答率を11.2ポイント下回った。 ●「植物のつくりとはたらき」に関する問題で、くきを縦に切った時の断面図を答える項目では、市の正答率を1.3ポイント、国の正答率を9.9ポイント下回った。	・実験や観察などを通して実際に事象を確認することが難しい学習内容に関しては、ICT機器や動画資料等を積極的に活用し、理解を深めることができるようにする。 ・日頃から植物に親しませる等、植物の生態について理解を深められるようにする。

宇都宮市立戸祭小学校 学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で、重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
・自ら考え、伝え合い、理解し実践する児童の育成	・児童に本時の授業や学習全体の流れについて見通しをもたせる。それにより、やるべきことが理解しやすくなり、活動の方向性を具体的に考えることができる。よって自らの能力を生かして問いに挑戦しようという意欲がわくと考える。 ・友達と話をして考えを広げたり、他者と関わって問いを解決したりする場を設ける。その取組により、自分の学習に有効であると感じることで、一層双方向のやりとりが充実し学習への効果が上がると考えられる。	アンケート結果によると、授業の理解度に関してはほぼ市の結果と遜色はなく、進んで取り組んでいるかに関してはほぼ全ての学年で結果は上回っていた。
・読書時間の確保と習慣化の構築	・朝の読書や読み聞かせによる本に触れる場を引き続き設けることや学校図書館司書や委員会による本に親しむ機会の充実を図っていく。	アンケート結果によると、「いろいろな種類の本を読むことは、楽しい。」と回答した児童はほとんどの学年で市の結果を上回り、昨年度と比較してもほぼ全ての学年で結果は上回っていた。

★国・県・市の結果を踏まえての次年度の方針

本校の傾向として、学習していておもしろい、楽しいと思うことや、いろいろなことが分かったり、できるようになったりすることはうれしいと思う児童は学年差はあれど8割～9割程度となっており、授業が分かるという児童の数値と同程度である。このことから、昨年度からの取り組みが実を結んできていると考えられる。その一方で理由や根拠をあげて話すことができると回答している児童は6割～7割程度となっているため、次年度以降も引き続き自分の考えをもてる子はその根拠となるものも明示できるようにし、難しい子は自分が何を分かっていて何で困っているのかを仲間に聞けるような学習形態を取ることで、誰もが分かる授業を目指していく。